

学校法人明治薬科大学

教職員が受信するスパムメールが激減 SPAM WATCHERで重要なメールを見落としてしまう不安も解消

学校法人明治薬科大学（以下、明治薬科大学）は、日々、教職員に対して大量に送りつけられるスパムメールに悩まされてきた。そこでダウジャパンが提供するSPAM WATCHERアプライアンスモデルを導入。結果、教職員に届くスパムメールは激減し、重要なメールを見落としてしまう懸念もなくなった。その後、サーバのリース期限切れに伴うシステム全体の見直しに先立ち、SPAM WATCHER Virtual Appliance for Vmwareへの切り替えを実施。効果的なスパムメール・ウイルスメール対策に加え、隔離フォルダのバックアップ体制を低コストに構築することにも成功している。

会社情報

法人名：学校法人明治薬科大学
所在地：〒204-8588
東京都清瀬市野塩2-522-1
URL：<http://www.my-pharm.ac.jp/>



課題

- ・教職員を標的とするスパムメールが増え続けていた
- ・スパムメールの中から業務に必要なメールを探し出すのにかなりの時間を費やしていた

効果

- ・教職員に届くスパムメールが激減した
- ・隔離フォルダのバックアップ体制を安価に構築した

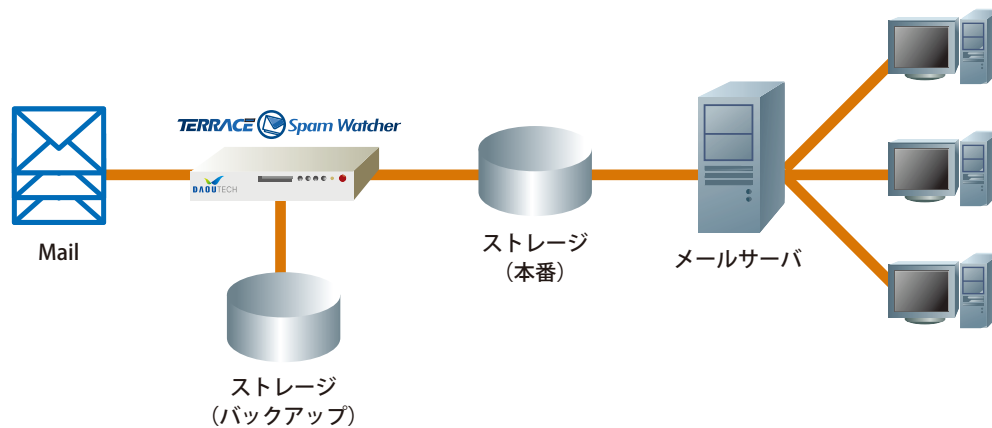
電子メールアドレスを公開する教員が スパムメールの標的に

東京都清瀬市に本部を置く明治薬科大学は、1902年に設立された東京薬学専門学校を前身とする。同大学は2006年4月に、薬学部にて6年制の薬学科と4年制の生命創薬科学科を併設。長期の実務実習と充実した臨床教育を通じて高度な学識を有する薬剤師や、薬学のスペシャリストを多数輩出している。薬学部の新卒300名が受験した第97回薬剤師国家試験では、294名が合格し、合格率98.0%を達成した。

同大学では、教職員に対して日々大量に送りつけられるスパムメールを排除することが長年の課題として存在していた。中でも教員は、学会や研究発表などの職務上の都合によって自身の電子メールアドレスをWeb上に公開するケースが多い。このため、悪意のある第三者によって設置されたクロウラーに電子メールアドレスを回収され、スパムメールのターゲットになる可能性が必然的に高くなってしまった。総務部 学術情報課 課長 宮田 博英氏は、「教員の大半が1日に受信する電子メールの3分の2以上をスパムメールが占めようになり、業務に必要なメールを探し出すのにかなりの時間を費やすようになりました。加えて、重要なメールを見落とすことによる業務への支障も懸念されるようになったのです」と語る。

このような課題を解決するため、同大学では無償のスパムメール対策ツールを使用した時期もあった。しかしながら、このツールではスパムメールを適切に処理できないばかりか、重要なメールをスパムメールと誤判定してしまうケースも頻繁に見られた。この中で、約200人の教職員を対象にしたスパムメール対策ツールの導入プロジェクトに着手した。ツールの選定では、低コストかつ短期間で導入できること、漢字などの2バイト文字に対応していること、ネットワークの構成やサーバの設定を変更せずに利用できることなどを重要な要件として定義。複数のツールを総合的に評価した結果、すべての要件を満たしたSPAM WATCHERアプライアンスモデルの導入を決めた。

NECが中心に行った開発では、ブリッジモードに対応するSPAM WATCHERにより、ネットワークの構成やDNSサーバ、およびメールサーバの設定を変更することなく、スパムメールを隔離する仕組みを構築。万一のハードウェア障害時にもメールの送受信を止めない仕様にし、2007年7月にSPAM WATCHERを稼働させた。



直感的な GUI で運用ルールを独自に改善

稼働後、効果はすぐに現れた。SPAM WATCHERによって教職員に届くスパムメールは激減し、大量に届くスパムメールの中から業務上の重要なメールを探し当てる手間がなくなった。総務部 学術情報課 課長補佐 松永 正隆氏は、「SPAM WATCHERが検知したスパムメールはユーザ別の隔離フォルダに格納される仕組みです。教職員は直感的なWeb コンソールから隔離フォルダを確認できるため、万一、業務上のメールが隔離されても見落とすことはありません。ユーザが自らフィルタリングのルールを変更し、使い方を改善できる点も好評です」と話す。

SPAM WATCHERの活用を深める中で、同大学は万一のハードディスク障害に備えた隔離フォルダのバックアップ体制を低コストに導入することも検討するようになった。通常、バックアップをとる場合、メインとサブのサーバを同期しながら保持し、メインに障害が起きればサブに運用を引き継ぐ構成をとる。このバックアップ体制を構築するため、同大学はサーバのリース期限切れに伴うシステム全体の見直しを機に、SPAM WATCHER Virtual Appliance for VMwareへ切り替えることを決めた。

2009年6月、新たに導入した仮想サーバ上にSPAM WATCHER Virtual Appliance for VMwareを実装。仮想サーバのデータを格納するバックエンドのファイルサーバにNECのiStorageを据え、安価なNASで隔離フォルダのバックアップをとる仕組みにした。

こうして同大学は、送信元のメールアドレスや件名、本文に含まれるキーワードなど、設定した複数の条件をもとに電子メールの振り分けを行い、スパムメールが教職員の手元に届くのを遮断している。スパムメールやウイルスメールの検知率や処理性能を低下させることなく、隔離フォルダの消失リスクも低減できたことは大きな成果だ。今のところ重要な業務メールをスパムメールと誤認識してしまったケースはないが、隔離フォルダ内のメールを約3カ月間保管できるディスク容量も確保した。

宮田氏は、「ITリテラシーの低い教職員でも直感的な操作で独自に仕組みを改善できるため、セキュリティ管理者の手を煩わせることもありません。今やSPAM WATCHERは、スパムメールやウイルスメール対策の中核ツールとして欠かせない存在です」と話した。

お問い合わせ